

平成14年度第2回日本生物物理学会運営委員会議事録

日時：2001年12月8日（土）13：00～

場所：大阪大学吹田キャンパス 銀杏会館3階会議室C

出席者：柳田会長、津田副会長、児玉副会長、阿久津、伊藤、入佐、上田、宇高、栗原、後藤、佐甲、柴田、高橋、中村、美宅、喜多村、各運営委員、猪飼会誌編集委員長、今井平成13年度年会実行委員長、倭年平成14年度会実行委員長代理

議長：児玉副会長

報告事項：

① 平成13年度年会総括報告（今井、資料 報1）

資料の通り、平成13年度年会実行委員長、今井氏より平成13年度年会の参加者数（資料1）、決算（資料2）の報告があった。収入13,993,320円、支出11,229,803円、余剰金2,763,517円となった。平成13年度年会の特徴として、昨年度年会より始まったUMINによるオンライン演題登録システムの利用を継続したこと、一般公開のメインシンポジウムを行ったこと、新しい企画として「第1回女性会員を増やす会」と、講演会「科学研究費について」、「研究者と知的財産権」を行ったこと、年会保育所の充実に力を入れたことが報告された。年会保育所の充実についての報告（資料3）。利用形態として、ベビーシッターによる託児サービス（300円/子/h、兄弟姉妹割引50%）、保護者同伴での親子休憩室（無料）を設け、3日間でのべ15名の利用があり、運営費の一部として（株）インビトロジェンより60,000円の寄付を受けたとの報告があった。利用後のアンケートでは、来年度以降も利用したいという意見が多かったとの報告があった。UMINによるオンライン登録の問題点についての指摘があった（資料4）。一時登録演題数が1200に達し、実際よりもかなり多くなったが、これは重複登録が多かったことによるとの報告があった。登録締め切り直前の駆け込み登録が多く、事務局宛に登録できないという苦情が殺到したとの報告があり、駆け込み登録による混雑のせいでサーバーの応答が遅くなり、登録されていないとおもって何度も「登録ボタン」を押してしまうなどの原因が重複登録につながったとの指摘があった。また、登録者が登録番号やパスワードをメモしていないことによるトラブルや抄録のフォーマットの不具合を確認していないなどのトラブルがあったことが報告され、次回からなるべくそういうことがないように事前に連絡を徹底することが申し送り事項として指摘された。事前参加登録者数が少なかったことが報告され、今年度は事前参加登録締め切りまでの期間が遅かったためであるとの指摘があった。今年度より液晶プロジェクターの利用が増え、それに伴う問題点についての報告があった。すべての機器をレンタルする場合、液晶プロジェクターが1台あたり5万円で、その他の設備が5万円、8会場3日間で240万円かかる概算になるとの指摘があった。また、使用時のトラブルが多発したとの報告があり、来年度以降の年会運営の課題となることが指摘された。今年度は非会員シンポジストの旅費として543,000円を負担したとなっているが、この件に関して以下のような議論があった。

伊藤：運営委員会の確認事項では年会から積極的に出すことになっていない。

阿久津：運営委員会としては、学会として負担しないということになっている。年会の責任として出すかどうか決めていた。今後も、年会の実行委員会との間できちんとした話し合いをしながら決める。年会の一般会計から支出するというふうにはできない。

また、余剰金の使途については、大阪支部としての企画案はないので、学会の運営費に入れた

いと、要請が柳田会長よりあった。学会として知名度がまだまだと言うこともあるので、PRに積極的に回すようにして、積極的に使うのはどうかという提案があり、承認された。学会より受けた準備金50万円は既に返したということになっており、余剰金全額を学会運営費に入れることが確認された。

② 平成14年度年会準備状況（倭、報告2）

平成14年度年会の準備状況について、平成14年度年会実行委員長の垣谷氏の代理として、倭氏より以下のように報告があった。平成13年7月26日よりこれまで3回の実行委員会を開催しており、年会実行委員長を選出・承認し、実行委員の選出・役割分担が決まった。組織としては例年の年会とほぼ同じ。日時、会場、概要については以下の通り。

日時：2002年11月2日（土）、3日（日）、4日（祝）

会場：名古屋大学東山キャンパス（名古屋市千種区不老町）

概要：一般講演はすべて口頭発表形式。シンポジウム案を一般、分野別専門委員による提案により公募。参加人数は1250名程度、予算は収支をそれぞれ約1300万円と見込んでいる。主な支出のうち今年度の年会報告にもあった、液晶プロジェクターなどの機器レンタル代を250万円見込んでいる。託児所として名大情報文化学部近くの名古屋学生センターを手配している（部屋の大きさ16畳、午前9時～午後5時までの利用が可能）。年会会場は共通教育棟を確保。130名以上はいる教室が14室。100～130名収容の教室が5室。小さい部屋は休憩室、クローク、学会本部として利用可。高校生・社会人向けの公開講演会を11月3日にシンポジオンホールで行う予定。この公開講演会については、科研費の成果公開の予算を申請している。開催日時については、例年10月の体育の日の連休に行うが、今回は生化学会と重なったため1ヶ月遅らせた。それに伴い、準備のスケジュールを例年より1ヶ月ずらしている。エーイー企画よりランチョンセミナーを企画してはどうかという提案があった。昼休みに食事付き講演を行うもので、講師は自分が執筆した本の内容について説明してその本の宣伝をするなどで広告収入を得る。分子生物学会などでは大きな収入源の一つとなっており、前向きに検討中。

また、収入に関して、企業から広告費とは別に寄付を集め積極的に収入を得た方がよいと、柳田会長から提案があった。平成13年度は広告代とは別に企業寄付金として200万円が集まった。

③ 3年以上会費滞納者の自然退会について（宇高、報3）

3年以上会費を滞納している会員は、正会員72名、学生会員130名で年々増加しているが、全体の会員数としては横這いであるとの報告があった。督促状の送付にも関わらず滞納している会員のリストが示されたが、この中で、間違いと思われる方に気づいた場合、本人及び宇高委員に連絡するように要請があった。

④ 生物物理バイオインフォマティクス講習会報告（倭、報4）

平成13年11月17日、18日に東京農工大学総合情報処理センターで生物物理バイオインフォマティクス講習会を開催。参加者約50名で、収入919,000円、支出563,676円だった。例年続いている講習会で、テキストは1冊3,000円で学会で販売している。

⑤ 「新生物物理の最前線」について（美宅）

10月20日に出版され、好評につきまもなく増刷するとの報告があった。学会の収入になるので積極的に宣伝するよう要望があった。

⑥ 編集委員会報告（猪飼、報6）

上記の件につき資料の通り報告があった（資料、報6）。入稿状況がやや少ないとの報告があり、はやく入稿してもらうようにするよう事務局より連絡する。

⑦ マニュアル本の検討について（津田、報7）

上記の件につき、津田出版委員会委員長より報告があった。30年ほど前吉岡書店から生物物理学講座が発行されたが、あらためて、生物物理学会としてこのようなマニュアル本を出版してはどうかということが出版委員会で検討されている。現在、検討委員が、生物物理学会として特徴的なものが作れるか、どのようなスタイルで、どのような読者層を対象に、誰に執筆を依頼するかなどを具体的に検討しているとの報告があった。かなり工夫しないと売れないので、どのようなタイトルの企画をするか今後、分野別専門委員、運営委員で議論してもらいたいとの要請があった。

学会のPRにもなるので積極的に進めてほしいとの柳田会長の要望があり、津田委員長からは、読者として分子生物学から神経科学まですべての分野の人を対象に、生物物理学会から生命科学の情報を発信できるよう、よいものを作れるように協力をお願いしたいとの要請があった。

⑧ ノーベル賞100周年記念国際フォーラム参加者について（児玉）

学術会議の会長から、ノーベル賞100周年記念国際フォーラムへの出席者を学会単位で推薦するよう通知がきているとの報告があった。生物物理学会が推薦できるのは1人。誰をどのように推薦するかは、会長の判断にまかせることで承認された。

審議事項

① 次期会誌編集委員の選考について（津田、議1，10）

編集実行委員会が会誌編集委員会に、編集委員会が出版委員会という名称に変更され、それに伴い、選考規程（議10）内の名称も変更されたが、名称が変わっているだけで内容は以前のものと同じであるとの報告があった。推薦人（運営委員、前編集委員、前地区委員）より推薦のあった中から、出版委員会にて選考を行った。現委員との分野の重なりや、女性会員、若手会員を考慮に入れて選考し、辞退された1名を除き、出版委員会で選考した原案通り決定したとの報告があり、承認された。議題10に関連して、会誌編集委員長の交代時期について、猪飼会誌編集委員長より質問があった。以下、この質問に関する議論である。

猪飼：会誌編集委員長の任期は12月までとなっており、規則上は、現在はまだ石渡氏が委員長になっている。

津田：年会（10月）以降は、実質的には次期委員長に交代している。

柳田：規則を変えた方がいいのではないかな。

津田：編集委員長の場合は、会誌の1号から名前を変えた方がいいので交代が1月になっている。

柳田：会長の任期も12月までだが、実際は10月で交代しており、ややこしい。

阿久津：会計年度が12月になっているから。

津田：運営委員会も年会で新旧合同委員会を開いて、10月で交代してしまう。年会の次期によって、9月になることもあるし11月になることもある。

柳田会長の提案によって、来年以降の交代時期をどうするかは今後の運営委員会で検討すること

とになった。

② 平成 14 年度会誌表紙の印刷部数について（入佐、議 2）

会誌の表紙と入会申し込みはがきの印刷部数が出版委員会で決定された（資料、議 2）ことが報告され、承認された。年間予算は 820 万円（送料別）。これに関連して、学会センターから、入会をサーバー上で行うシステムが来年 1 月にはできる見通しであるという連絡があったことが中村委員より報告された。入会用の葉書はいらなくなるかもしれないが、葉書による申し込みの方法も残しておいた方がよいだろうということで、毎年 1 号（および今年発行予定の会員名簿）には葉書を入れることが決まっていると、津田出版委員長および入佐委員より報告され、承認された。

③ 平成 14 年度分野別専門委員の決定について（入佐、議 3）

平成 14 年度分野別専門委員の候補を、会誌担当運営委員マニュアルに基づいて決定したことが報告された。削除した分野が 1 つ、新設した分野が 1 つで総分野数は 130 で変化なしということで、承認された。

④ 平成 15 年度年会について（美宅、議 4）

神経化学会との合同で行うことが検討されている。前向きに検討するという事で神経化学会の御子柴理事長と相談している。神経化学会では、他学会とジョイント大会を推進することが理事会で正式に決まっているが、特定の学会との合同をすることに関しての最終決定は今後の理事会で了承を得なければならない。会場は新潟県に建設中の施設で行う予定。新潟県が学会の開催等に積極的で、補助金を出してくれる（予算の 1/3 程度、300－500 万円）が、県側の決まりで、運営委員会で正式決定する前に決める必要があったので書類を提出したとの報告があった。開催の形式については、同じ場所で開催し、懇親会、合同シンポを行うという形式で、相互の会員がそれぞれの会に参加できるようにすることを計画している。2 つの学会で 1 つの会を行うというようなタイトなカップリングではない。以下、この件に関する議論である。

美宅：運営委員会で決定する前に書類を提出したが、運営委員会の決定如何でどうするかはこれから決めればよいと考えている。

柳田：東京でやるはずの会を新潟でやるということだけが問題になるのか。一緒に開催すること自体は問題ないと思う。

阿久津：本来なら運営委員会で議論してから、具体的な話をするべきだ。

柳田・美宅：まだ、何も決定してないのでこれから運営委員会で議論すればよい。相手方も一緒にできればいいといっている程度で、既成事実があるわけではないのでこれから決定すればよい。

後藤：将来もジョイントを続けていくのか。

柳田：分子生物学会も是非一緒にやりたいと言っている。

後藤：生化学会・分子生物学会は 1 回で終わった。どういう目的で行うのかははっきりした方がよい。

柳田：タイトなカップリングではないので、PRなどを考えると良いのではないかな。

美宅：新潟県に出した書類では、生物物理学会が 2003 年 9/23－25 で、神経化学会が 24－26。全く同一ではない。

上田：ホテルなどの宿泊についてはどうか？

美宅：県側との話ではとくにそういう話はなかった。

伊藤：サイエンスとしては生物物理と全くオーバーラップがない。運営面のメリットだけ。

美宅：補助は両方の学会に独立にでる。

上田：同時期に同じところでやるという程度で、表向きジョイントとしないのか。

柳田：フォーマルにはジョイントにした方がよい。

美宅：補助としては400万位か。

阿久津：お金よりサイエンスを重視するべき。

美宅：同じような内容の学会ではないので、むしろ良いのではないか。

阿久津：何か共通性がないとPRにもならないのではないか？

中村：会長の方針として他分野との交流を重視するということを知らしめると言う意味では、そんなに奇異ではない。

柳田：東京の人がオーガナイズすることが決まっているのに何故新潟で開催するのかの理由がいる。

以上のような議論に基づき、運営委員会としては、前向きに検討するということで、新潟でやるということは決定し、ジョイントという名前をつけて、別々にやるという方向で、具体的なスタイルについては今後検討していくことが承認された。

⑤ 平成 15・16 年度学会委員候補者推薦について（佐甲、議5）

平成15・16年度学会委員候補者の推薦についての公告が会誌の1月号に掲載されることが報告された。例年推薦が少ないが、あたらしい方法があれば提案してほしいとの要望があった。公告内容は例年通りのもので問題がなければ、このまま掲載するということが承認された。

⑥ 生物物理学会会員名簿について（中村、議6）

生物物理学会会員名簿を作成するにあたり、名簿調査カードを会員全員に送ることになっているが、文面についての確認があった。調査項目に新たに性別が加わったが、これは、学会として男女比率を発表しなければならないことがあるため、会員の男女比を把握しておく必要があるためである。あくまで学会が数字を把握するという目的なので、名簿には記載しない。名簿には掲載しないということを葉書に明記するということが報告され、承認された。これに関連して、eメール、オンラインによる会員登録が、学会センターと前向きに検討中であることが報告された。分子生物学会ではアクセス数が少なかったことやシステムの不具合などもあり、現在作業中、とのことであった。また、学会センターにある会員情報を得ようとする、そのたびに料金がかかるという指摘があり、以下のような議論があった。

児玉：支部の名簿を作ろうとしたときに学会センターに依頼するとお金がかかると言われた。

栗原：年会の時に作成した名簿を引き継ぎしているはず。

今井：今年の年会の時に、会長室に問い合わせたら古いものしかなかった。

中村：学会の会長室が名簿をもっていないのもおかしいので、名簿が更新されるときに事務センターと交渉する。

また、現在の名簿は立派でよいが、他学会の用にスリム化できないかということが以前の運営委員会で議論されていたことの確認があったが、それはこれから検討されるということであった。

⑦ 財政将来計画 WG について（津田、議7）

財政将来計画ワーキンググループについて去年の運営委員会で設立が検討・承認されたことが報告された。学会の定常運営のためには、1年間程度の蓄財が必要ということから、8年ほど前

から積み立てが始まり、現在約2000万円が特別会計としてある。しかしながら、毎年運営委員会によって使い道が異なり、コンセンサスが得られていないのではっきりさせようという主旨で設立された。WGのメンバーは、会長、副会長2、経理2の5名。その中で、以下の各項の確認と検討を行ったとの報告があった。

- 1) 予備費を蓄える目的の再確認。
- 2) 税制上の問題。
- 3) 学会事務所設立へむけてどれくらい経費がかかるかの調査。
- 4) 特別の事業展開のために予備費を使用する場合のガイドライン。

この中で、2)については、公認会計士に相談し、税制上問題ないことが確認された(資料、議8)。3)については、これまで、同名目で積立がなされた次期もあったが、結局なくなった、事務局の具体的なイメージ、学会としての方針がはっきりしていない、一人だけやとってみても効率的でない、などの指摘があり、事務所を持っている他学会にも所属している伊藤委員に調査を依頼することが承認された。委託する場合、委託先としては、リアライズ、学会事務センターなど。4)の特別予算の使い道について以下のような議論があった。

阿久津：他学会も持っており、税制上も現在は問題ない。運営委員会の審議を経て使い道を決定する。

栗原：年会の赤字補填50万円を超えるものはできないことになっているが、大きなお金がかかる場合は事前に運営委員会に諮って可能なら、増額できるようにするべき。

柳田：補填できないと明記するのはおかしい。

中村：赤字がでた場合、年会主催者が自分で補填する訳にもいかないのだ。

以上の議論をふまえ、書き換えることになった。

⑧ 学会の課税関係について(津田)

議題⑦の中で確認されたため、割愛。

⑨ Advances in Biophysics について(津田、議9)

Advances in Biophysics は、毎年800部発行されており、出版費として毎年200万円必要である。これまで、ボランティアとして編集委員の先生が工面していたが、継続することが難しく、来年出して終わる予定であるという話が学会出版センターよりあった。日本発の生物物理のレビュー誌としての役割を担っているので何とか学会として続けられないか、学会出版センターの松野氏より依頼があった。現在編集を担当している丸山先生に相談したところ、学会とは関係ないので、終わっても良いとおっしゃっていたとの報告があった(資料、議9)。この件に関し出版委員会で議論がなされているが、これについて以下のような議論があった。

柳田：続けられるものなら続けた方がよい。学振の助成を受ける努力をして、うまくいきそうなら、丸山先生に相談する。

津田：歴代会長で議論したらどうか。お金、編集、について丸山先生と相談し、その後検討する。

柳田：学会としてAIBを出版するならばつだが、学会で全責任をとるのは無理。

阿久津：顧問会議に聞いてみたらどうか。

後藤：外国の人も入れるなどして規模が大きくなればいいのだが、現状の規模で続けていく理由があまりないのではないかな。

柳田：出版委員会の意見としてはそれほど積極的ではない。

美宅：現状の数字としては良いほう。

後藤：現状では、積極的に推進するのは良いとは思わない。

以上の議論をふまえ、丸山先生の下承を経て、伊藤委員が学振に助成の申請するということが承認され、3年後また考えるということになった。

⑩ 生物物理会誌編集委員会構成員選考規定の承認（津田、議10）

承認された。

⑪ 第1回アジア光生物学会議への補助の申請依頼（津田、議11）

第1回アジア光生物学会議への補助の申請依頼があり、承認された。金額10万円。

⑫ 来年の年会シンポジウムについて（中村）

名古屋ではポスターがなくすべて口頭なので、シンポジウムが真ん中の日のみで6会場であるため、今年のようにすべての案を採択するというようにはできない。この件に関し、選考の方法について運営委員会で議論し、決定権が年会、運営委員会のどちらにあるかも決定して欲しいとの要望があった。これまでは、年会担当の副会長が分野別専門委員の意見をまとめて、運営委員で投票して最終決定していた。中村委員（年会担当）、垣谷氏（年会実行委員長）、児玉副会長（次期年会担当の副会長）でまとめて、最終的に運営委員で決定することが提案され、承認された。年会に関して、会員を増やす目的で、名大の他分野の人（会員でない人）に参加できるようにできないか、という提案が柳田会長よりあった。この件に関し、以下の議論があった。

柳田：今年の阪大での年会の時も、同じ提案をしたが、運営委員会で却下された。今年はどうにかできないか。

津田：今年は、会員でも払っていない人がいた。

柳田：発表するのに払わないのは言語道断。発表しないで参加する場合はどうか。

津田：発表しなくても参加する人は多いので、結構な金額になる。

宇高：いいわけがあれば、いいのではないか。

柳田：名古屋大学の職員・学生に限るというのでは、どうか。

津田：区別するのも難しいし、会員からのクレームも出るのではないか。

中村：赤字を出すと言われる一方で、そういうことを推奨するのは矛盾する。非会員の参加者の収入が100万円あるので、そこがマイナスになる。

後藤：名札をつける。

伊藤：2002年はいいということになったとして、2003年はどうするのか。今年はいいけど来年はだめというのはおかしい。

柳田：それは年会によっても良いのではないか。

以上の議論をふまえ、年会実行委員長の垣谷氏には児玉副会長が連絡し、検討することになった。

⑬ 会長秘書の河合氏が名古屋から大阪に移ったことによって発生する経費を支出するということが柳田会長から提案され、承認された。

連絡事項

eメールによる学会関係の連絡は柳田会長だけではなく津田、児玉両副会長、河合氏にも Cc する。

次回以降の運営委員会の日程について

第3回運営委員会 4／6（土）13：00～ 東淀川勤労者センター

第4回運営委員会 7／6（土）13：00～

第5回運営委員会 11／2（土）昼（年会中）

平成15年第1回運営委員会 11／4（祝）昼（年会中）

以上 （書記：喜多村）